

大

学

2025

11

時

No.

425

報



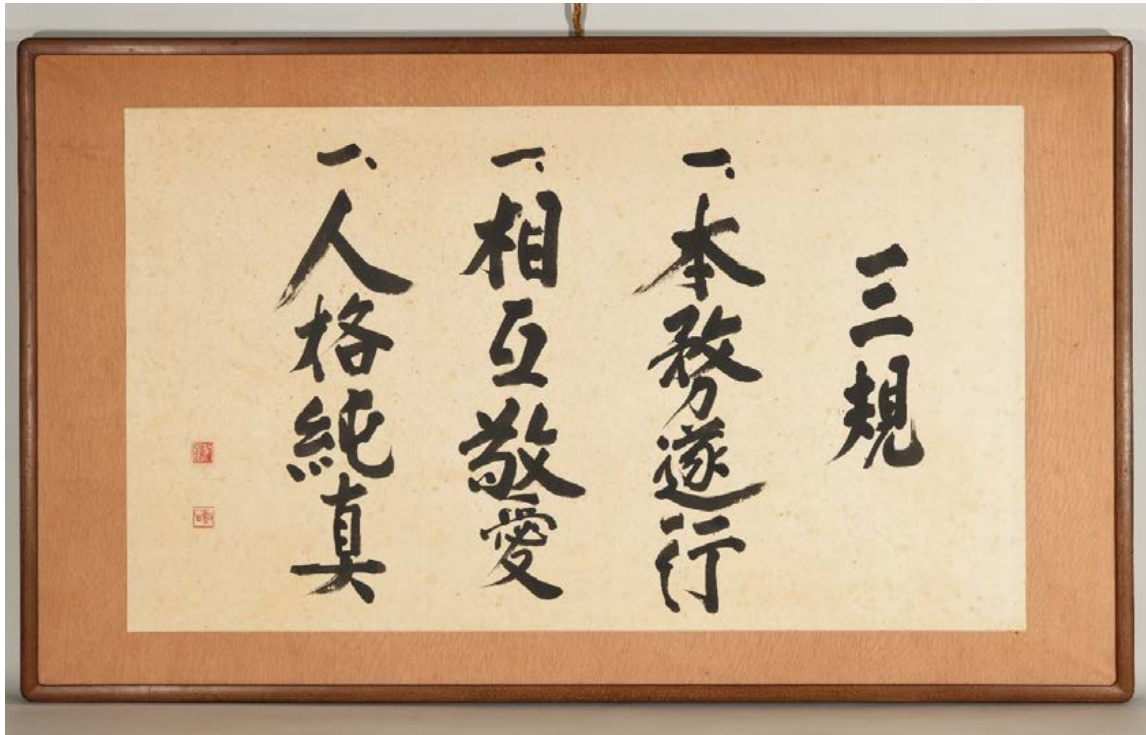
｜特集｜

専門ミュージアム
—大学の知と文化の発信拠点—

日本私立大学連盟

ISSN 0288-1748 2025(令和7)年11月20日発行【隔月刊】

大谷大学



第3代学長の佐々木月樵(げっしょう)「大谷大学樹立の精神」に掲げられた三モットー
(第20代学長の松原祐善(ゆうぜん) 筆)



1913年に現在地へ移転した当時の「本館」
(現在の「尋源館(じんげんかん)」
【国・登録有形文化財 第26-0058号】)



2018年に竣工した
新教室棟「慶聞館(きょうもんかん)」と尋源館

大谷大学の人間育成

「国宝とは何物ぞ」と問いを立て、「道心有るの人」を国宝だと言い切ったのは伝教大師最澄である。これになぞらえるならば、大学の宝は建物、文物、図書も大事ではあるうが、やはり「人」であると言わねばなるまい。

大谷大学は江戸時代の学寮開設以来、今年で360年を迎えた。また、近代の大学として東京の巣鴨に「真宗大学」の名で開学してから120年あまりの歴史を刻んできた。その後、1913年に京都の現在地に移転し、今年で112年となる。その間、仏教の精神に基づいて、多くの人物を世に送り出してきた。

本学の人間育成の3つのモットーとして、第3代学長・佐々木月樵は「大谷大学樹立の精神」において「本務遂行、相互敬愛、人格純真」を掲げた。自らの本務を遂行すること、お互いに敬愛すること、自他をごまかさず純真であること、の3つである。本務とは本来のつとめを意味するが、単に与えられるも

のではない。自分が何のために生まれてきたのかを問うことを通して、初めて明らかとなる。それは他者との関係の中で見えてくるものでもある。本学は、この精神を現在も大切にして教育に当たっている。

「人」は大学にとって宝であるというだけでなく、世間にとっても宝であり、何よりその人自身の人生が何物にも代えがたい宝である。

今年は「大谷大学樹立の精神」が出されて、ちょうど100周年に当たる。あらためて大谷大学の人間育成の願いを確かめる時である。

CONTENTS

76	72	68	66	64	60	56	52	46	40	32	30	14	10
だいがくのたから 大谷大学 大学点描 天理大学 巻頭言 まごころで道を照らす「優しい」を超える100年に 永尾比奈夫 視点 歴史の中の大学 小原克博 座談会 アカデミック・ライティング支援のいま 小林至道／飯野朋美／太田裕子／土屋和代／（司会）松田美佐 特集 専門ミュージアム―大学の知と文化の発信拠点― 京都国際マンガミュージアムの20年―京都精華大学の取り組み― 勝島啓介 都会で感じる海と人のつながり 茂木正人 時をこえて響く音―活用と保全の調和を目指した知の発信― 不動真優 都心で見学できる化石の水族館 宮田真也 創立100周年を迎える演劇博物館の活動 児玉竜一 小さくてもきらりと光るミュージアム ―学習院の歴史と知の集積を未来に伝える― 長佐古美奈子 ずいそう 建学の精神に支えられる「無形資産」 西中利也 小特集 大学を起点とする「出会い」のデザイン 「ゆる婚」―同窓会主催の婚活イベント 渡邊英司 愛大ビジネスクラブ―基本理念は、『出会い』『絆』『相互扶助』― 八木好郎 現代に生かす福澤諭吉の「人間交際」 ―新事業創出を支援するメンター―三田会― 宮地恵美													



78	マツチング理論による大学業務の改善	野田俊也
84	寄稿「私立大学のミライー研究編」	
92	「みる・つかう・つくる」デジタル地図の現状と参加	瀬戸寿一
98	寄稿「私立大学のミライー教育・地域連携編」	
102	共通基礎科目「人間学」での全学的挑戦	赤澤清孝
104	私の授業実践く教育現場の最前線からく	
106	社会に役立つ人材を育てる	八木茂典
108	明日への試み	聖カタリナ大学健康社会学部
110	心・社会・身体の健康づくりに寄与する	大黒屋貴稔
120	加盟校の幸福度ランキングアップ《銀杏並木編》	
121	キャンパスを見守り続けるイチヨウ並木	青山学院大学 政策・企画部 大学広報課
123	紡ぐ繋ぐハーモニーロードー個性が奏でる美しいハーモニーー	吉田輝美
124	苗木から育てた銀杏並木	伊藤泰彦
125	クローズアップ・インタビュー	
126	銭湯ペンキ絵師	田中みずきさんに聞く (聞き手)川島葵
127	新会員代表者紹介	
128	専修大学	
129	執筆者・出席者のく紹介(掲載順)	
130	私大連ニュース	
131	編集後記	



2025年、天理大学は創立100周年





天理大学



100th ANNIVERSARY
CONNECT 「つながる」を、始めよう。





100th ANNIVERSARY
CONNECT「つながる」を、始めよう。



100th ANNIVERSARY
CONNECT 「つながる」を、始めよう。



6つのCONNECT

"気づきと成長"をもたらす「つながり」の接点



世界とつながる。
CONNECT



社会や地域とつながる。
CONNECT



学生同士が つながる。
CONNECT



学部学科が つながる。
CONNECT



卒業生と つながる。
CONNECT



ビジネスと つながる。
CONNECT

知の探究

University Current Review

大学時報

2025.11/NO.425



まごころで道を照らす
「優しい」を超える
100年に

永尾 比奈夫 天理大学学長

天理大学は創設当初から、多様な人々が助け合い共生する「陽気ぐらし」世界の実現に寄与する人材育成に取り組んできた。

100周年を迎えた2025年からは、その理念を揺るがすことなく、加えて「優しさ」を超えた「たすけあい」を促進する。次の100年に向けて、世界的な視野に立ち、さまざまな「つながり」のなかで学びを実践し、社会と人との接点を結ぶ方法を自ら見つけ躍動できる人材の育成を目指す。

まごころを指針に。受けた恩を力に。「他者への貢献」を加速してゆきたい。

歴史の中の大学

小原 克博 同志社大学学長

1. 危機の予測と対応

このところ、めっきりと、話の枕詞に「急速な少子化の時代に」といった表現が使われるようになった。2040年には約17万人の入学者が減少することなどを示す各種統計データがセットで示されることも増えた。ちなみに、大学教育を取り巻く危機的状况を伝える情報が溢れており、不安な思いで15年後の大学の姿を想像する機会も増えたのではないか。しかし同時に、中央教育審議会答申「我が国の『知の総和』向上の未来像」の冒頭において「この危機を、大学をはじめとする高等教育機関の活動を強じんなものとし、国内外の社会課題の解決に貢献することにより、社会全体の活性化を促す好機と捉え」とあるように、時代の危機を、変化を促す「好機」として捉える姿勢が今ほど求められている時代はないと

も言える。

目先の情勢に振り回されずに、15年後どうなっているのかを長い時間軸で考える必要性を強く感じる必要がある。そのきっかけとなったのは、同志社が今年、創立150周年を迎え、私自身、その起源や歴史を振り返る機会を多くもったことにある。明治の新時代を迎え、当時の知識人たちは挑戦的とも言える目的を掲げ、学校（私塾、私学）を設立した。同志社の創立者・新島襄は「自治自立」、「智徳並行」などの人物育成の理想を掲げたが、150年後の今、当時掲げられた高邁な目的の中で達成できたと言えるものは何一つない。まだまだ道半ばである。新島は、勝海舟に大学事業に必要な年数を聞かれた際に「大学の完成には200年」と答えたと言われている。長大な時間軸で教育事業を考えていたことに驚嘆する一

方で、正直なところ、2000年で「完成」に達するとも思えない。同志社大学の重要なパートナー大学であるドイツのテュービンゲン大学は、2027年に創立550周年を迎える世界最古の大学の一つである。どの分野も世界トップレベルの実力を持つ名門大学であるが、そのような大学であったとしても550年で完成するわけではなく、今もアグレッシブに挑戦を続けている。また、その長い歴史は大学そのものの歴史をも想起させる。

2. 大学の来歴と社会的役割

現代の大学の起源は12、13世紀の中世ヨーロッパにある。当時の学生は、教育の基礎としてのリベラルアーツ（自由7科）の学びを経て、神学・医学・法学を含む上級学部に進学した。リベラルアーツを含む古代ギリシアの知見はヨーロッパでは忘れ去られて久しかったが、11世紀にイスラーム圏から、翻訳された古代ギリシアの学問がヨーロッパに再流入することになった。そして、キリスト教の伝統とヘレニズムの新たな出会いが、知の化学反応を引き起こし、リベラルアーツの復興だけでなく、大学システムそのものを生み出していったのである。

このように、「知の爆発」を誘引・牽引し、社会そのものを変えていくポテンシャルを大学教育は持っている。どの国や地域にも危機的な時代はあった。産業革命以降に限っても、技術革新や産業構造の変化は、伝統的な職業を淘汰し、人々に大きな危機をもたらした。労働環境の急激な変化と共に、新しい知識と技能を修得することが求められたが、いつの時代も、教育を改善・改革することによって、その変化に対応してきたのである。

そして、それは西洋に限ったことではない。日本では江戸末期から明治初期にかけて、全国各地に私塾が起り、従来からあった漢学（儒学）、国学だけでなく、医学、天文学、地理学、化学などを含む洋学・蘭学も積極的に学ばれた。私塾は、単なる古典教育の場だけでなく、西洋学問の導入や実学の普及にも重要な役割を果たした。そして、その卒業生たちが明治維新後の政治・産業・教育の担い手になっていったのだ。こうした社会の激変期にあって、福沢諭吉や大隈重信、そして新島襄らは、教育の新しい可能性を夢描いたのであった。

3. 世界観と歴史観を養う

戦後80年となる今年、日本社会はその80年を総括できているのだろうか。戦争の記憶は遠のき、戦中・戦前の何が問題であったのかを検証するのは決して簡単なことではない。同志社はキリスト教主義学校であるため、戦争の時代には、敵性宗教を掲げる学校として軍部からの厳しい監視と弾圧を受けた。戦時下の危機を生き延びるために、同志社では当時の国家体制に順応しようとする努力もなされた。学徒出陣（1943年）以降、数多くの学生が犠牲となった。同志社もまた戦争の時代を十分に総括できているわけではないが、多くの過ちを含め、これらの出来事が学校史の中に刻まれていることは、歴史を振り返る上で大切な手がかりとなる。

今、国際化やグローバル化は、どの大学にとっても重要な課題として認識され、学生を世界の各地に送り出し、また世界の各地から学生を迎え入れている。研究上の交流もおのずとグローバルなものになっている。国境を越えて、世界とのつながりを深め、世界観を豊かなものにしていくことは、次世代を担う若者たちにとって重要な課題である。世界観と共に大切なのは歴史観である。歴

史と世界に対する認識は、それぞれが縦糸と横糸になって絡み合っており、緻密で柔軟な知的世界を織り上げていく。歴史認識を欠いたままでは、今、世界が直面している複雑な問題を俯瞰したり、掘り下げたりすることが難しくなるだけでなく、世界、とりわけアジアの人々との信頼関係を構築することもできないだろう。

私は宗教研究を専門としており、一神教（ユダヤ教・キリスト教・イスラーム）世界を主たる研究対象としてきた。一神教の歴史を通じて、人類と紛争・戦争の係について研究してきた。考古学的証拠によって遡ることができる最古の戦争は1万年以上前のものであるが、それ以降も、戦争は途絶えることなく今に至っている。

何とも気の重くなる話であるが、人類にとっての未完の課題に取り組むべく、文部科学省「21世紀COEプログラム」に応募し、採択され、「一神教の学際的研究―文明の共存と安全保障の視点から」（2003―07年度）というプログラムを主導したことがある。中東、アジア、米国等で国際会議を開催し、問題の根深さを身をもって経験した。何千年も続く対立や紛争の解決方法を5年のプログラムで提示することなど到底不可能であるが、世

界の生々しい現実を知ると同時に、自分自身の歴史認識が深まったのは大きな収穫であった。

4・天空の彼方から少子化を見る

20～30万年前、ホモ・サピエンスは現れた。大脳皮質が他の動物と比べ肥大化した人類は、自分の行為がどのような帰結をもたらすのか、あるいは、目の前で起きている現象の原因は何なのかを推測する高度な力を得た。それゆえ、太古の昔から、人間には自分の経験や疑問を納得させてくれる「物語」（理論と言い替えてもよい）が不可欠であった。そのための重要な役割を担ったのが、この世界にも見られる数々の神話である。

太古の人類は、星空を眺め、天空に織りなす神々の世界や、神による天地創造の物語などを自らの存在に重ね合わせながら、豊穡なコスモロジー（世界観・宇宙観）を紡ぎ上げていた。しかし、現代人はもはや星空を見上げることはなく、もっぱらスマホを見ている。宇宙と人間が切り離されているような状況と言える。他方、様々なイデオロギーの対立が今も紛争や戦争を引き起こしている。気候変動や経済格差のように、国の違いを越えて

取り組まなければならない地球規模の喫緊きつきんの課題もある。地球規模の課題を「自分ごと」として受けとめるためには、かつて人類がもっていた豊穡なコスモロジーを現代にふさわしい形で回復・再構築する必要があるのではないかと思索している。イデオロギーではなく、新たなコスモロジーによって、より包摂的な人類社会を目指すことができないかと。

天空の彼方から見れば、少子化などちっぽけな問題に過ぎない、などと言うつもりはない。しかし、目の前の危機を必要以上に過大視して、内向きに萎縮してしまうのではなく、大きな歴史観と世界観の中で、大学が果たすべき固有の使命を見出すことができれば、その危機は「好機」に見えてくるかもしれない。それは目の錯覚であろうか。いずれにせよ、日本の近代教育を切り拓いていった先人たちのように、危機の時代においてこそ、教育の新しい可能性を大胆に夢描きたいものである。